



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭の言
Author(s)	芒亭
Description	出典：各務時報 40号 昭和 4年 12月 25日、各務時報 41号 昭和 5年 2月 25日、各務時報 42号 昭和 5年 4月 30日、各務時報 43号 昭和 5年 5月 30日。
Citation	各務時報
Issue Date	1929-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77664
Type	article
File Information	A008_1936-52S4-S6_Part2.pdf



第 四 十 二 號

岐阜高等農林學校友會

昭和五年四月三十日發行

卷 頭 言

天涯に土と我とのみしか考へない。春の午後
はのどかである。漸く温まつて來た土壤のよい
感觸が身に沁みる。大地の吐息が五体にとけ込
んで來るとでも云ふのか。
だが安値なロマンティズムの夢は追ふまい
霜を割つて芽ばえて出た麥はもう一尺ものび
た。その深い緑の色は誰れのものだ。
ふと耳をすますと警鐘とジャズの音が響いて
來るよ。

(芒亭)

第 四 十 三 號

岐阜高等農林學校友會

昭和五年五月三十日發行

卷 頭 言

刈りとられた菜種の束が無難作に一山に積み
あげられてある中に、可愛さうに二三輪の黄色
い花がまだ實にならぬ中に刈りとられて居た。
「馬鹿／＼しい。何時まで春だと思つてゐるのだ」
刈りとつた人はさう思つたのだらう。若しか
したら此僅か二三輪の不幸なる落伍者の花は
彼は一顧だに拂はなかつたのかも知れぬ。
「一匹の迷へる羊」よ
私がお前の爲に泣いてやる。だが泣いてやる
より外に仕方がない。

一芒亭

第 十 四 號

岐阜高等農林學校友會

昭和四年十二月二十五日發行

卷 頭 の 言

庭の満天星の紅葉も盛りをすぎて疲れ切つた生
色のない葉ももう幾ひらか残つて居る丈である。
靜かに庭に立てば初冬の氣が手足に沁み入つて來
る。試みに満天星の一枝を仔細に見入ると小枝の
尖端毎にもうすつかり新芽の準備が出來上つて居
る。その新芽の一つをもぎとつて見るとこの一冬
の寒さに戦ひぬくに充分な生氣がそこにこもつて
居た。
梅の木はもうとつくに葉は一枚もないけれど
つや／＼とした緑の新しい小枝にはもう蕾の形が
が宿つて何時にても花さく準備が出來上つて居る
庭の隅で自然に生へ出て殆ど顧られない小さい楓
を木にもふくらむばかりになつて居る幼芽が澤山
に出來て居る。
庭はさびしくはない。葉は落ち花は一つもない
けれども。
何と云ふつゝましやかな自然ではないか。その
不斷の營みは何と云ふ眞剣さではないか。
庭は只春が來るばかりである。

第 十 一 號

岐阜高等農林學校友會

昭和五年二月二十五日發行

卷 頭 言

矜りとは自分が自身を満足する氣持ちである。
自分の行爲に對して小賢しい人間達ではなく神
が下した嘉賞である。他の人々に誇示するよろ
こびでは勿論ない。神の前に價値あるものの自
らなるよろこびである。千尋の海底に獨り光る
眞珠の玉の永遠のよろこびである。
空の星は皆とり／＼の光りに見えるけれども、
どの星も一つ一つ矜りを持つて居る。矜りを失
つた星は落ちるのだ。
友よ
靜かに強く足取つて行け。
又一つ星が飛ぶ。

(芒亭)